

名将と名刀との邂逅

明智光秀



二英傑

Akechi Mitsuhide to Saneiketsu

The fierce battle between a great general and a sword

伝長船近景 (号明智近景)



来国光 (名物有楽来国光)

織田有楽斎



備州長船住長義 (名物大坂長義)



備州長船住景光



時を駆けた光秀と、
天下を獲った二英傑たち

東海道を制覇した武将たちと刀剣武具

関ヶ原を駆けた英傑たちと名刀

日本刀の美を知る「五箇伝」

名古屋刀剣ワールド 名刀コレクション

- 国行(来) ●伝国俊 ●来国光 ●貞宗 ●備州長船住景光 ●吉房
- 伝兼光(金象嵌) 本多平八郎忠為所持之 ●伝正宗 ●国光(新藤五)
- 洛陽一条堀川住藤原国広 ●津田越前守助広 井上真改
- 国宗 ●長曾祢興里入道帟徹 ●村正 ●山浦環正行 他収録

明智光秀と三英傑が求めた 権力の象徴たる日本刀

文◎小和田泰経

明智光秀ほど、三英傑の人生に影響を及ぼした武将はいません。織田信長は、本能寺の変で討たれ、天下統一を実現できませんでした。もし、本能寺の変がおきていなかったと仮定したら、豊臣秀吉は信長の家臣のままだったことでしょうし、徳川家康は信長の同盟者のままだったことでしょう。

かつて光秀は、「謀反人」とされてきました。しかし、それは、光秀を山崎の戦いで滅ぼした秀吉を正当化し、さらに秀吉から政権を引き継いだ家康を正当化するため、意図的に貶められてきたということを忘れてはなりません。秀吉や家康にとってみれば、光秀は「謀反人」でなければ困るという大人の事情があつたわけです。

そのため、光秀の人物像については長らく関心がもたれてきませんでした。特に、忠義を重んじる儒教道徳が生活の規範となつた江戸時代においては、光秀の行為は非難されるべきものと理解されていたほです。しかし、戦国時代

の武士道では、下剋上^{げくじやう}つまり「下上に剋つ」ということが、社会通念として認められていました。「下」いうのが家臣であり、「上」というのが主君です。

江戸時代の武士道では、「忠臣は二君に仕えず」とされていた。ただ一人の主君に忠義を尽くすのが、武士のあるべき姿とされていたのです。そのため、主君が亡くなったとき、側近も主君に殉じて自害するという「殉死」まで行われていました。

しかし戦国時代に、そのような考えはありません。そもそも、光秀は足利義昭と織田信長に仕えていました。しかも、足利義昭から織田信長に乗り換えたというのはなく、同じ時期、二人に仕えていたのです。それは、二人からそれぞれ知行を与えられていることから明らかです。もちろん、「能臣」だったからこそ両属が認められていたものと思いますが、少なくとも、光秀は主君を選べる立場にあつたのは確かでしょう。

信長が義昭と対立したとき、光秀は義昭と袂を分かち、信長に従いました。しかし、光秀が義昭を見捨てたとは限りません。忠義の心は持ち続けていたのではないのでしょうか。なぜ光秀が本能寺の変をおこしたのか確かな原因はわかっていません。最近では、義昭を再び将軍として復位させようとしたためとも考えられています。

いずれにしても、光秀は信長を討つことには成功しますが、その後の政権の樹立に失敗しました。政権を樹立できなかったのも「謀反人」とよばれるようになったにすぎません。もし山崎の戦いで秀吉を破り、政権を樹立することができていれば、「乱世の奸雄^{かんゆう}」と称されていたでしょう。

本能寺の変は、光秀をはじめとする武将の運命を変えただけでなく、それぞれの武将が所持していた名刀の運命をも変えました。その意味からすると、本能寺の変が刀の歴史にも影響したといっても過言ではありません。

古来、名刀は権力者のもとに集まるのが世の常でした。室町時代には、献上あるいは買い上げによつて將軍のもとに刀が集まっています。しかし、応仁・文明の乱を機に幕府の権威は失墜し、13代將軍足利義輝は、幕府の実権を握つていた三好長慶の家臣らに殺

害されてしまいました。このとき、

將軍家が所蔵していた多くの刀も、奪われてしまったようです。

その後、義輝の弟義昭を奉じた信長が入京し、義昭を15代將軍につけます。こうして信長は三好氏の一党を服属あるいは滅亡させ、多くの名刀は信長の手に渡りました。そのため、安土城で保管されていた名刀などは、本能寺の変後、光秀に奪われます。しかし、山崎の戦い後には、光秀を討つた豊臣秀吉らが奪還しました。これらの名刀も、関ヶ原の戦い、大坂の陣を経て徳川家康が手に入れ、江戸時代には諸大名に下賜されたりしました。そうした名刀が、現在まで伝えられているわけです。

本誌では、一般財団法人刀剣ワールド財団が所蔵する三英傑にゆかりの名刀を中心に紹介しています。名刀から名將を知ることができます。内容となっておりますので、名刀のそのものの魅力と合わせ、戦国時代の歴史を楽しんでいただければ幸いです。

おわだやすつね 小和田泰経

1972年生まれ、東京都豊島区出身。國學院大學大学院文学研究科博士課程後期退学、日本中世史を専攻。戦国武将・城郭・合戦・武器に詳しく、また講演活動多数。静岡英和学院大学講師と早稲田大学エクステンションセンター講師を務める。主な著書に『兵法 勝ち残るための戦略と戦術』（新紀元社）など。

熱田神宮

三種の神器のひとつ、草薙剣を祀る神社として知られる。また、織田信長が桶狭間の合戦に臨む際、戦勝祈願をしてこれに勝利したことは有名である。

002 明智光秀と三英傑が求めた権力の象徴たる日本刀 ― 小和田泰経

006 巻頭特集 美濃で生まれた戦国時代の雄 名将・明智光秀

014 第一章 明智光秀と三英傑 その生涯と日本刀

016	悲運の知将 明智光秀の足跡
018	刀 無銘 伝長船近景(号明智近景)
020	天下統一の立役者 織田信長の一生
022	信長実弟秘蔵の短刀
024	立身出世伝の象徴 豊臣秀吉の生涯
026	太閤殿下の懐刀
028	短刀 銘 備州長船住長義 正平十五年五月日(名物大坂長義)
030	徳川260年の泰安の礎
032	太刀 銘 備州長船住景光 正和五年十月日

032 第二章 天下分け目の戦い 関ヶ原の合戦と武将たちの名刀

034	戦国時代の覇者が決まった関ヶ原の合戦
036	東軍 本多忠政・短刀 銘 来国光(名物塩河来国光)
038	池田輝政・太刀 銘 正安三年四月日 恒光
040	井伊直政・刀(金粉銘) 弘行琳雅(花押)
042	片桐且元・太刀 銘 直綱作
044	京極高次・薙刀 銘 和泉守兼定作
046	西軍 石田三成・薙刀 銘 丹波守吉道
048	佐竹義宣・刀 無銘 来国光
050	上杉景勝・太刀 銘 国宗
052	立花宗茂・刀 無銘 伝二字国俊
054	吉川広家・刀 無銘 伝備前真守

056 第三章 日本刀のルーツ 五箇伝を知る

058	大和伝
060	山城伝
062	備前伝
064	相州伝
066	美濃伝

068 第四章 名古屋刀剣博物館所蔵 名刀コレクション

070	太刀 銘 貞真
071	刀 折返銘 備前国住吉次
072	太刀 銘 吉弘
073	刀 無銘 貞宗
074	刀 無銘 伝来国俊(金粉銘 来国俊)
075	刀 銘 備前国住長船忠光 延徳三年二月日
076	太刀 銘 一(吉岡一文字)
077	太刀 銘 信包
078	太刀 銘 基近造
079	太刀 銘 正恒(古青江)
080	刀 無銘 伝長義
081	刀 金象嵌銘 兼光
082	刀 無銘 畠田真守
083	刀 無銘 伝来国次
084	短刀 銘 国光(新藤五)
085	短刀 銘 備前国住雲次
086	刀 無銘 二字国俊
087	刀 無銘 伝兼光(金象嵌)本多平八郎忠為所持之
088	刀 銘 津田越前守助広 延宝二年二月日
089	井上真改 延宝三年二月日
090	刀 銘 洛陽一条堀川住藤原国広 慶長辛亥八月日
091	刀 銘 山浦環正行
092	刀 銘 村正
093	刀 銘 長曾祢興里入道希徹
094	刀 折返銘 備前長船住元重
095	刀 銘 山城大掾藤原国包 寛永十一年二月日
096	刀 銘 長曾祢興正(金象嵌)延宝四年十二月十日
097	貳ツ胴截断山野勤十郎久英(花押)
098	刀 銘 越後守包貞 延宝四丙辰八月吉日
099	薙刀 無銘 長船秀光
100	刀 銘 水心子正秀 天明五年二月日 彫同作
101	刀 銘 和泉守国貞
102	刀 銘(葵紋)於武州江戸越前康継
103	以南蛮鉄末世宝二胴 本多五郎右衛門所持
104	刀 銘 一竿子栗田口忠綱 彫同作
105	太刀 銘 守家
106	太刀 銘 長光
107	太刀 銘 豊後国行平作
108	脇差 銘 直胤(花押) 天保六年八月
109	刀 無銘 伝江

110 収録刀リスト

美濃で生まれた戦国時代の雄

名将・明智光秀

主君の織田信長を本能寺で死に追いやった、
反逆者というイメージが強い明智光秀。

そのためかどうかは定かでないが、
光秀の出自に関する記録は少なく、
どれも曖昧として判然としない。

そして、生誕地は美濃国から近江国にかけて
各地に点在している。

いずれの説が正しい説か、その真偽については
歴史研究家に任せることとして、
それぞれの生誕地とされる場所に残された
光秀の遺構を訪ね歩いてみた。

文◎不来方次郎 撮影◎大村仁

美濃国で生まれ育った
戦国時代屈指の知将

土岐氏は、美濃源氏の嫡流として
平安時代から鎌倉末期に美濃国を中
心に栄えた武家集団である。源頼朝
に仕えた初代土岐光衡は瑞浪郡に居
館を構え、土岐の本拠とした。現在
の瑞浪市一日市場八幡神社境内辺
りが居館のあった場所で、土岐氏発
祥の地とされる。室町時代になると、
幕府とともに、土岐一族は隆盛を誇り、
浅野氏、明智氏、肥田氏、仙石氏な
ど多くの庶流に分かれ、最盛期には
美濃、尾張、伊勢の守護大名となり、
一大勢力を築いた。

土岐頼康の弟、土岐頼兼が分家し
て、康永元年（1342）明智荘に
明智城を築き、土岐明智家の祖と
なった。明智光秀は、その九代目に
あたるともいわれている。光秀は、
光綱とお牧の方の子として享禄元年
（1528）明智城で生まれたとさ
れるが、出生地や生まれた年に関し
ては諸説あり定まっていない。それ
ぞれの説には根拠もあり、史跡も残
されている。ゆえにいずれかを正論
と位置づけ、残りを間違いとするの
も今となっては難しいといえる。
確かなことは、逆臣の歴史ゆえに
その痕跡もはつきり残されていない
ことだ。しかし、諸説を追うことで、
光秀の素顔を垣間見れるのかもしれ
ない。

土岐明智氏系図
明智一族
宮城家相伝系図書



近江最古とされる神社「白鬚神社」

創建二千余年、全国に300の分霊社が祀られる白鬚神社の総本社。
織田信長の安土城と琵琶湖を挟んだ対岸に光秀が縄張りした大溝
城が築かれた。白鬚神社は大溝城の近くに鎮座しており、光秀も
参拝していたといわれている。



天龍寺と明智一族歴代墓所

永平寺を本山とする曹洞宗の古刹「天龍寺」は、明智城の北麓に位置する。本堂には、光秀の等身大とされる日本一の大きさを誇る位牌が安置されている。また、境内には明智氏歴代墓所があり、毎年6月に光秀供養祭が執り行われる。



族は発展し、浅野氏、明智氏、肥田氏、仙石氏などの庶流に分かれ最盛期には美濃、尾張、伊勢の守護大名はもとより、常陸や上総などにも点在し一大勢力を誇った。

土岐氏の家紋は、万葉集に「朝貌の花」と詠まれた桔梗紋を基本に、一族のシンボルとして色やデザインを微妙にアレンジしながら使った。そのため、多くの庶流からなる土岐一族は家紋にちなんで「桔梗一揆」とも呼ばれたという。当時、桔梗紋は戦国武将の憧れであり、織田信長も土岐氏庶流の証である明智光秀の桔梗紋を羨んだともいわれている。

光綱と牧の子として明智城で生まれた光秀は、青年期までを明智城で過ごしたが、稲葉山城主の斎藤



明智光秀座像

本堂内に安置されている光秀を写したとされる木造座像。仏のような穏やかな表情から光秀の人柄が偲ばれる。

義龍と斎藤道三との「長良川合戦」で、明智光継の娘である小見の方が正室として嫁いだ道三の側に付いた。しかし、義龍に道三が敗れると、「長良川合戦」の5カ月後に明智城は攻め落とされ、光秀は命からがら越前へと逃れた。落城間際の明智城主だった光秀の叔父・光安は自害する直前、光秀に明智家の再興を託したとされている。

明智家と縁の深い瀬田の天龍寺には明智氏歴代の墓所や、光秀の等身大とされる6尺1寸3分(184cm)で作られた日本最大の位牌が安置されている。また、現在は耕地整理によつてなくなってしまうが、光秀が生まれた際に使われた産湯の井戸跡も同地に伝わっている。

明智城址と大手門

康永元年(1342)、土岐頼兼が瀬田村の小高い丘陵に築いた山城。光秀は、明智城で生まれ29歳頃まで明智城で過ごしたと考えられている。大手門は、本丸北側の山道の途中にあり、これはのちに推定復元された物である。また、本丸西の支脈上にある六親眷属幽魂塔付近から人骨が発掘された。明智城落城時の戦死者の人骨と推定され、ほかに錆びた刀、武具なども発見されている。



【説一】 光秀出生の痕跡が色濃く残る 可児市の明智城址と天龍寺

光秀の生誕地として最も有力視される明智城址

明智光秀生誕の地として、最有力候補に挙げられている可児市「明智城址」は、岐阜県の中南部、木曽川と可児川ほとりの小高い丘陵を利用して築かれた山城である。

江戸時代に編纂された『美濃国諸旧記』によると、現在の可児市瀬田地域一帯は平安時代より明智荘と呼ばれていた。康永元年(1342)、美濃源氏の土岐下野守頼兼が、この地に土着する際に姓を明智と名乗り、土岐明智氏の初代として「長山城」(明智城)を築城。その後、落城するまで代々土岐明智氏が居城したとされる。

平安時代から鎌倉末期に美濃国を中心に栄えた土岐氏は、美濃源氏の流れを汲む武家集団である。源頼朝に仕えて御家人となった初代土岐光衡は、現在の瑞浪市一日市場八幡神社境内辺りに本拠となる居館を構え、ここが土岐氏発祥の地になったとされる。

室町幕府の隆盛とともに、土岐一



落合砦跡と光秀産湯の井戸

鎌倉時代、遠山景重によって築かれた明智城跡の戦略拠点とされたのが千畳敷砦（落合砦）そこで光秀が生まれ、誕生した際に産湯に使ったとされる井戸が伝わっている。



十兵衛屋敷跡

滋賀県多賀町佐目地区の十二相神社門前に、十兵衛屋敷跡がある。屋敷の跡地に案内標柱が残っているだけだが、近くには樹齢 600 年超の見事な杉木立がそびえる十二相神社がある。



【説①】

古文書『淡海温故録』に見る 大垣市、多賀町出生説の謎とは

養子で明智城に出された 大垣市多羅城出身説

多良歴史同好会発行『進士山岸家嫡流明智光秀公「ゆかりの地」見聞記』には、東京大学史料編纂所の『大日本史料』にある「明智氏一族宮城家相伝系図書」の中に、明智光秀は享祿元年（1528）8月17日、石津郡多羅に於いて生まれると記されている。多羅は進士家の居城だったとされ、現在の石津町多良の周辺にあったと考えられているが、現在まで出生地について、具体的な場所は特定されていない。

また可児市羽崎在住の林則夫氏所蔵「明智氏血脈山岸家相伝系図書」より編纂された『明智光秀公家譜古文書』によると、光秀の実母は明智城九代当主明智光綱の妹である市の方とされている。この市の方は多羅城の山岸信周に嫁いだ。そして、多羅城で懐妊した市の方が出産のために里帰りしていた明智城で産気づき、享祿元年（1528）8月に光秀を出産した。光綱とその妻美佐保は嫡男に恵まれず、その子を明智家は

の養子として迎え入れ、光秀と命名したとある。

一方、大垣市多良と鞍掛峠を挟んだ現在の滋賀県多賀町にある「十兵衛屋敷跡」が、光秀出生の地とする新説が、近年新たに打ち出された。十兵衛とは光秀の通称であり、近江国佐目村の十二相神社近くには光秀が住んでいた「十兵衛屋敷」があったとする口伝が、500年にわたり



西高木家陣屋跡

西高木家は大和高木の出身で、伊勢を経て美濃に移ったとされる。斎藤道三や織田信長に仕え、関ヶ原の戦功によって多良を安堵される。同家の屋敷と屋敷門、屋敷周囲の石垣などが現存する。

代々受け継がれている。そして、その内容が光秀の出自を記述した最古の古文書である『淡海温故録』と一致したのだという。

この発見により、これまでの光秀生誕地説に新たな説が加わり、出生の謎はさらに深まったといえるのではないだろうか。

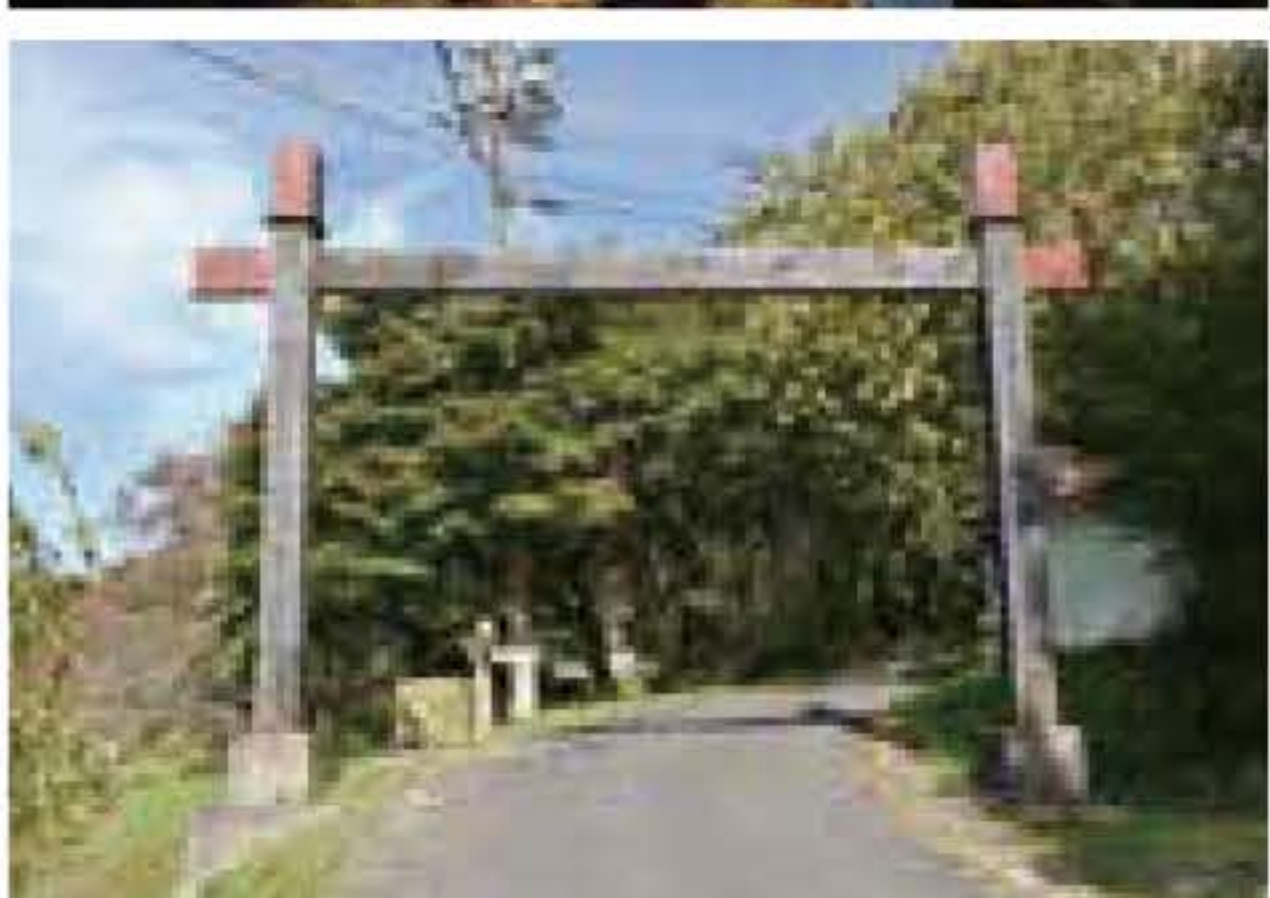
【説②】

光秀誕生は 土岐一族発祥の地？

土岐氏発祥の地に 伝わる光秀生誕の地説

瑞浪市の一日市場八幡神社境内には、光秀を輩出した土岐氏発祥の地とされる「一日市場館」跡がある。源頼朝に仕え美濃国守護に任ぜられた土岐光衡が同地に居館を構えたことにより、土岐氏が始まったと考えられている。その後、一族は美濃、尾張、伊勢の守護大名に任ぜられるなど、室町幕府とともに栄えた。明智氏も土岐氏の庶流であることから、光秀のルーツもここにあるといえるだろう。

ところで、現在の恵那市南端の明智町には、明知城が築城された宝治元年



明知城址（白鷹城）

宝治元年（1247）に築城され、明知遠山氏累代の土地だった。光秀出生の城という話もあるが生誕地そのものである可能性は低い。



お牧の方墓所

光秀の実母お牧の方の墓。破却を逃れるため墓標にしたという樹齢 400 年の高野槇がそびえ立つ。



一日市場八幡神社

土岐氏の初代光衡が「一日市場館」と呼ばれる居館を構えたことから、土岐発祥の地とされている。

鎌倉時代初期から中期に、備前国で興った刀工一派、福岡一文字のなかでも、初期の刀工を指して古一文字（こいちもんじ）と呼ぶ。この古一文字の祖といわれているのが、後鳥羽上皇の御番鍛冶（ごばんかじ）を務めた則宗（のりむね）で、その孫にあたるのが久宗だ。



ひさむね　こいちもんじ 太刀 銘 久宗(古一文字)			
長　　さ	76.8cm	反り	2.6cm
鑑定区分	特別重要刀剣	時代	鎌倉時代初期
刀剣種別	太刀	刀工	古一文字久宗
制　作　国	備前国	所蔵	刀剣ワールド財団

に華麗な重花丁子乱刃を焼いた吉房、助宗、則房ら福岡一文字派が登場した。さらに近隣の吉岡、畠田、和氣、そして長船などにも、優れた刀工が出現している。なかでも長船は光忠を祖とし長光、景光、兼光といった名工を輩出。後に備前伝といえば長船派を連想するほど、隆盛を誇ったことはよく知られている史実である。

その功績で特筆されるのは、日本刀の大量生産に成功したことだろう。南北朝の統一に成功した足利義満は、訪れた泰平の世における戦略として日本刀の輸出を画策。中国の明国と行なう「日明貿易」の主要輸出品に、刀剣を用いた。長船刀工もその需要に大いに応じたものと思われる。そしてこの貿易は大成を取め、幕府は莫大な外貨利益を得ることに成功する。

ところで、備前伝の特徴といえ、茎のすぐ上から反っているように見えることが挙げられる。これは腰反りと呼ばれる姿だ。地鉄は柰目混じりの板目肌。刃文は霞のような匂による丁子乱れ刃や互の目乱。鑢に沿って刃文と同じような形の映りが白く浮かんでいる。刃文の刃縁に付く細かな沸は光を反射して輝く。帽子は刃文に従って乱れ込み、返りは浅い小丸となっている。

数多くの名刀と日本刀の量産化成功の鍵は水と炭

現存する数多くの刀剣のうち、備前伝と伝わるものはもともと多いとされているが、これには大きな理由がある。まず、備前伝が発達した古代の吉備国にあたる備前、備中、備後エリアには多くの古墳が残されていることから、強力な政権が存在していたと考えられている。周辺の権力者たちが武器を必要としたことに加えて、背骨のように聳える中国山地は、古くから良質な砂鉄の産地として知られていた。さらに吉井川流域では水や炭も手に入ったため、鍛冶が盛んになったのは自然の成り行きであつたともいえる。

また、この地域では平安時代後期から鎌倉時代初期にかけ、古備前と呼ばれる刀工たちが生まれている。備前国はどの時代も政治の中心地から離れていたため、その盛衰に左右されることがなかったのも、繁盛した要因と考えられるだろう。鎌倉時代初期には福岡荘

「一文字吉房」（いちもんじよしふさ）は五振りが重要美術品に指定されているが、本刀は愛刀家の誰もが認める大名刀として知られる。刃文は、純然たる匂（におい）本位の百花繚乱と咲き誇った、八重桜の匂うような重花丁子乱れ（じゅうかちょうじみだれ）を得意とし、刃文の華麗さで天下一品と激賞されている。

よしふさ 太刀 銘 吉房			
長　　さ	70.2cm	反り	1.9cm
鑑定区分	重要美術品	時代	鎌倉時代中期
刀剣種別	太刀	刀工	一文字吉房
制　作　国	備前国	所蔵	刀剣ワールド財団



本刀は、長船初期の名作で織田信長の父織田信秀（おだのぶひで）の愛刀。信秀没後、信長に引き継がれた日本刀であると考えられている。長船景光は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて作刀した刀工で、代表作の「小竜景光」（こりゅうかけみつ）は楠木正成（くすのきまささげ）の佩刀と伝えられる。

かげみつ　お　だ　だんじょうのじょうのぶひですりあげこれ 刀 無銘 景光 織田弾正忠信秀摺上之			
長　　さ	70.9cm	反り	1.7cm
鑑定区分	特別重要刀剣	時代	鎌倉時代末期
刀剣種別	打刀	刀工	長船景光
制　作　国	備前国	所蔵	刀剣ワールド財団



良質な砂鉄の産地が生んだ名刀たち